

令和5年度学校自己評価システムシート（大妻嵐山中学校・高等学校）

目指す学校像	○建学の精神「学芸を修めて人類のために」を実現する学校 地域との連携の下で、学校社会貢献活動を推進する社会的価値を目指す学校 ○学祖大妻コタカ先生の教育理念に基づき、人格の陶冶を目指す学校 校訓「恥を知れ」の下で、自らを厳しく律し、自立した女性を育成する学校	目指す生徒像 （求める生徒像） アドミッションポリシー	○自らを学問的・人間的に鍛え、己の使命を果たし人類に貢献する意欲を持つ女性 ○自らを厳しく律し、広い教養を備え、他を思いやる共感力と高い志を持つ女性	重点目標 （資質・能力に関する方針） グラデュエーション・ポリシー	1 未来を生き抜く「探究する力」を育成する 2 未来を生き抜く「表現する力」を育成する 3 未来を生き抜く「感じる力」を育成する 4 未来を生き抜く「自ら学ぶ力」を育成する 5 組織的な広報活動を展開し、入学者を確保する
--------	--	-----------------------------------	---	---	--

達成度 Aほぼ達成（8割以上）・B概ね達成（6割以上）・C変化の兆し（4割以上）・D不十分（4割未満）

番号	現状と課題	目標	具体的方策	達成度	達成状況及び次年度への課題
I 入試 広報	①中学入試…入学者増と受験者増の二本柱での募集活動 ア 入学者増に向けた取組 「まなび力エキスパート入試」は着実に定着しつつあるが、「まなび力入試」との差別化が難しく、検討が必要である。 イ 受験者増に向けた取組 延べ受験者は増加したが、実受験者数は減少した。一般入試、奨学入試、まなび力入試とは異なる学力層に働きかけることが必要である。 ②高校入試 内進生が少なかったが単願者は増加し、募集戦略が一定の成果を上げた。大学付属のアドバンテージを中心に、ポリュームゾーンへの働きかけを継続する。	○入学者数 中学：50名 高校：150名 ○出願者数 中学：1000名 高校：単願100名 併願300名	①中学募集 ア 「適性検査型入試」の新設 イ 「まなび力入試」と「まなび力エキスパート入試」との一本化 ウ 「大妻特待入試」への名称変更 エ 大手中学受験専門塾との連携 オ 中学受験の掘り起こし事業（学校社会貢献活動）の拡充 ②高校募集 ア 中学校を中心とした募集対策の実施（母校訪問、全職員による中学校訪問、外回り担当による中学校訪問の充実） イ 高校選択セミナーの拡充 ウ 地域指定校推薦制度（校長推薦制度）の拡充 エ 個別相談の強化	B	① 中学募集・入試は、概ね目標を達成した。 ○「学び力エキスパート入試」への一本化では出願者は増加し、第一志望入試としての性格は着実に定着しつつある。 ○「第1回入試」では出願者が大幅に増加し、受験者確保に一定の成果をあげつつある。 ○新設の「適性検査型入試」では出願者数は伸びなかったが、これまでとは異なる受験者層の確保には一定の成果が見られた。 ○中学受験専門塾との連携を深め、情報交換や説明会に積極的に参加した。 ○継続的な情報発信が奏功し、指定校入試での受験者を確保できた。 ○社会貢献事業「わくわくワークショップ」は、対象エリア拡大による参加者の増加が見られた。今後は質的充実への転換が必要である。 ② 高校募集・入試は、変化の兆しが見えた。 ○4～6月に社会貢献事業「高校選択セミナー」を6会場で実施し、中学生の進路意識の醸成に寄与するとともに本校の存在を広く周知することができた。次年度は実施時期を検討し、内容についてブラッシュアップさせる。 ○地域指定校推薦制度の認知度が徐々に向上し、有効活用されるケースが増加した。 ○出願者数、入学者数ともに目標に達せず、次年度も継続課題とする。
II 進路・ 学習 指導	○進路意識の啓発を図り、概ね進路希望実現は図られている。 しかし、難関大学への希望実現が達成されたとは言いきれず、指導方法を工夫していく必要がある。早慶上理・GMARCHを中心とした私大をベースに、総合型で勝負できるプログラム、小規模である本校の利点を生かした個別対応を進める。 ○一方、特別進学コースでは、一般選抜入試をベースとし、勉強量を増やすなど負荷をかけて成長を促す。 ○大妻女子大学への進学者の質的・量的向上を図る。	○進路実績の向上 第一希望実現率 90% 大妻女子大学 40名 国公立大学 10名 早慶上理 10名 GMARCH 20名 ○自学力の向上 自学時間の1.1倍以上（前年比）	○生徒の進路意識の啓発 キャリア学習として多様なプログラムの策定など、企業・大学研究室訪問等との連携事業の拡充、キャリア探究活動の活用 ○具体的な進路指導策 ・大妻ゼミの充実 ・総合型選抜に向けてのプログラム策定（面接・小論文指導等） ○特別進学コースを中心とした外部模試の活用 ・模試のフィードバック、模試対策、SS（特進）運営委員会	A	① 進路指導については、ほぼ目標を達成した。 ○進路の第一希望実現は1/30時点で概ね90%以上となり、進路に関する自己効力感が期待通りとなった。 ○総合型選抜及び学校推薦型選抜において、東京農工大学、上智大学をはじめ難関大学合格の実績を上げることができた。また、大妻女子大学へは39名が入学し付属校としての存在意義を示すことができた。 ○キャリア学習として、大妻女子大学文学部の聴講、大妻女子大学家政学部の指導による「高校生による高校生のためのアパレル商品企画活動（m_r tokyo Girls）」、埼玉医科大学保健医療学部及び日本薬科大学での実習体験、理工電子系メーカー企業訪問を実施し、生徒の進路意識の発揚に効果を上げた。 ○グローバルリンクス講演会として、卒業生でもある国境なき医師団職員を招聘し、国際社会で活躍する女性の講演を聞くことで在り方生き方を考える契機とした。 ○SS（特進）委員会を活性化し、SS（特別進学）、SA（総合進学）、OG（大妻進学）の各コースの特色化をより一層推進する方策を検討した。次年度以降新規に、SS対象の縦割り勉強会、SA対象の総合型選抜応援プログラム、OG対象の大妻女子大学オンデマンド授業などに取り組み。次年度は、各コースの特色化を更に推進するための組織について検討したい。 ② 学習指導に関しては、ほぼ目標を達成した。 ○「新たな大学入試制度」「授業改善のヒント」「小論文指導の秘訣」「ICT教育の実践」「リテラシー教育の活用」をテーマとした教育研修を計画的に実施した。一方、観点別を含むこれからの学習評価方法について、さらに研究する必要がある。
III 生徒 指導	○大妻女子大の付属高校として、学祖・大妻コタカの教えを通して大妻精神を浸透させ、生徒の学校に対するエンゲージメントや満足感を高める必要がある。そのためにも、礼法・道徳教育を実のあるものとして再構築していく。特に探究の時間における「コタカ学」を充実・発展させる。 ○身だしなみについては概ねできているものの、挨拶については改善の余地がある。生徒会を中心とした生徒からの自主的な動きにも期待する。 ○生徒会本部、文化祭実行委員会等は自覚を持って活動している。このような活動の輪を、生徒全体に広げ、自立活動をさらに活性化していく。	○礼法・道徳教育の充実 ○「コタカ学」の充実 ○生徒会活動の活性化 ○部活動の活性化（強化部を中心とした活動実績、部活動の参加人数増） ○防災・安全教室の充実	○礼法・道徳教育に係るプログラム再構築 礼法指導、着付け教室、茶道教室、論語教育 ○自校教育 探究学習としてコタカ先生の教えを学習 ○部活動の活性化 強化部を中心とした部活動のさらなる活性化、活動実績のPR充実 ○生徒会活動の活性化 地域やロータリーなどのボランティア団体等との連携 ○防災・安全教育の実施 警察、地域、保護者による防犯パトロールの実施 スクールカウンセラーによる相談体制の強化	A	① 大妻精神の醸成については、ほぼ目標を達成した。 ○外部講師により、論語講座（3回）、礼法指導（2回）、着付け教室（1回）を予定通り実施した。 ○総合的な探究の時間において学祖大妻コタカについての研究を行った。 ○毎月の生活目標として学祖の言葉を教室に掲示するとともに、校舎内に校訓を掲示し、身近な考えとして生徒に示した。 ② 部活動については、ほぼ目標を達成した。 ○中学バレーボール部が常に県大会の優勝決定戦を経て関東大会に出場し、ダンス部が強化部として説明会や学校行事で多くの発表の場を持つとともにコンクール出場回数を増加している。バドミントン部は中学、高校のいずれも県大会に出場し、ハンドボール部、バスケットボール部も県大会に出場した。 ○サイエンス部及び個人の活動として、国際学生科学技術フェア（ISEF）世界大会出場、科学技術チャレンジ（JSEC）全国大会入賞、科学教育振興展覧会埼玉県大会入賞など輝かしい成績をおさめた。また、書道部、美術部は全県的な大会で入賞が続いている。 ③ 生徒会活動は、概ね目標を達成した。 ○3年ぶりにほとんど制約のない形態で文化祭を行うことができた。 ○中学生徒会が自主的な活動として、縦割り給食会を企画・運営するとともに、高校生徒会と協力し合同クリスマス会を新たに立ち上げた。
IV 地域 連携	○嵐山の地で開校して56年の歴史を積み重ねてきたものの、他の伝統校と比較して、未だ地域に深く根差しているとは言いきれない。学祖・大妻コタカの「女子も自ら学び、社会に貢献できる力を身につけ、その力を広く世の中で発揮していくことが女性の自立につながる」との言葉にあるように、地域に根差し、社会的価値を創出する学校でありたい。そのためにも社会貢献活動として、本校が持つ教育資源を社会に還元していく必要がある。また、その教育活動自体を「社会の中で」、「社会の要請に応じて」、「社会と協働して」行うこと、さらには、長い歴史と伝統の中で蓄積された知的・人的・物的な資産として社会に開かれた活動を行うことが求められている。	○地域連携体制の構築 ○社会貢献事業の拡充 ○生徒のボランティア活動への積極的参加	○嵐山町社会福祉協議会と連携した「嵐山チャレンジプログラム」の立ち上げ ・近隣の小学校、特別支援学校との異校種交流事業 ・隣接する菅谷中学校、菅谷小学校とのトライアングル連携事業 ・埼玉県立嵐山史跡の博物館等、地域の体験活動施設との連携 ○大妻グローバルコース（大妻進学コース）を中心とした大妻女子大学との連携強化 ○埼玉医科大学、日本薬科大学等の大学および民間企業での見学、体験活動の実施	B	① 地域連携は、概ね目標を達成した。 ○社会貢献事業「嵐山チャレンジプログラム」をスタートさせた。嵐山町社会福祉協議会、嵐山史跡の博物館、嵐山町生涯学習課、嵐山町国際交流協会及び国際ロータリークラブとの連携を計画的に企画した。次年度は全校生徒対象の説明会を予定したい。 ○近隣の特別支援学校との交流は実施できたが、小・中学校との異校種交流事業は次年度の課題である。 ○大妻サイエンス（理科教育）の一環として校内で養蜂し採取した蜂蜜を利用し、町内のパン屋と連携して文化祭で販売し、本校教育についての理解を深めた。 ○大妻女子大学文学部、家政学部との連携、埼玉医科大学保健医療学部及び日本薬科大学での実習体験、理工電子系メーカー企業訪問は、開かれた学校づくりという点でも有効であった。